

マイクロヒストリーとは何か

—S.G.マグナッセン・I.スジャルト『マイクロヒストリーとは何か：理論と実践』—

橘 堇

Sigurður Gylfi Magnússon and István M. Szijártó
What Is Microhistory?: THEORY AND PRACTICE
(Oxon: Routledge, 2013)

Sumire TACHIBANA

1. はじめに

マイクロヒストリーとはなにか。本書の著者 I.スジャルト (István M. Szijártó) によれば、ある出来事、ある人物、ある地域など、限定的な小さな対象についての徹底した歴史的調査を行う手法である。1970 年から 80 年代にかけての歴史学の転換期、すなわち「伝統的なパラダイムに対する反動が、日本、インド、ラテン・アメリカなどの歴史家をも巻き込んで世界中に広がった時期」(Burke 1991=1996: 12-13) に出現したマイクロヒストリーは、現在に至るまで多くの研究を生み出してきた。これまで日本において、マイクロヒストリーが詳細に紹介されることは少なかったように思われるが^①、独特の特徴を備えたその視点や手法は、歴史学のみならず、歴史社会学の可能性を広げるものではないかと考える。よって本稿では、マイクロヒストリーの紹介を目的に、本書を紹介したい。

S.G.マグナッセン (Sigurður Gylfi Magnússon) とスジャルトの二人によって書かれたこの研究書は、“マイクロヒストリーとは何か” という問いに対し、理論や地理的な展開、方法論や可能性といった様々な観点から答えを用意する。多彩な視点を含んだ本書であるが、本稿では“マイクロヒストリーとは何か” に対する最もストレートな回答として、主にその構成概念を紹介する。本稿の構成は以下の通りである。まずは、著者について簡潔に紹介するとともに、本書の構成や特徴を整理する。次に、スジャルトのいうマイクロヒストリー構成概念である① “^{ミクロ}微視的な視点”、② “マクロな歴史学の問い (great historical question)”、③ “「行為=行為者」(agency) の重視” の三点を、それぞれイタリア、フランス、アメリカのマイクロヒストリー研究^②を用いて紹介する。さらに、マイクロヒストリーとマクロな歴史とのつながりや意義をまとめる。それらを踏まえ、最後にマイクロヒストリーの応用可能性について考察を行う。

2. 本書の紹介

本書は二人の著者によって記されている。第Ⅰ部を担当したスジャルトは、ハンガリーのエトヴェシュ・ローランド大学の経済史・社会史准教授であり、18世紀ハンガリーにおける政策の社会史や、マイクロヒストリーの理論的問題を主な専門としている。彼は、マイクロヒストリーネットワーク(<http://microhistory.eu/home.html>)という、インターネット上でマイクロヒストリー研究に関する情報を交換する国際的な研究者グループを創設し、とりまとめている。第Ⅱ部を担当したマグナッセンは、アイスランドの歴史学者で、レイキャビクアカデミー^③内にある、マイクロヒストリー研究センター所長である。彼は、自伝的など個人的書物に現れる文化に着目した研究を行っている他、マイクロヒストリーの方法論上の課題に関心を寄せており、また *Journal of Microhistory* の編集者もつとめている^④。

二人の共通点は、マイクロヒストリーの実践家として研究を積み重ねながら、同時に多くのマイクロヒストリー研究者を取りまとめてきた点にある。2006年に接点を持って以降、マグナッセンとスジャルトは、歴史学におけるマイクロヒストリーの方法論に関して、共に研究を行ってきたという。本書はマイクロヒストリー研究をリードしてきた二人が、手法としてだけでなく、理論と実践を包括的にまとめようとした試みである。

本書は2部構成をとっており、第Ⅰ部をスジャルトが、第Ⅱ部をマグナッセンが執筆している。目次は以下の通りである。

PART I (István M. Szijártó)

Introduction: Against simple truth

1. Italian microhistory
2. Under the impact of microstoria: The French and German perspective
3. Microhistory in a broader sense: The Anglo-saxon landscape
4. The periphery and the new millennium: Answers and new questions

PART II (Sigurður Gylfi Magnússon)

5. The doctor's tale: The living and the dead
6. Refashioning famous French peasant
7. New and old theoretical issues: Criticism of microhistory
8. A West Side story, and the one who gets write it
9. Postscript: To step into the same stream twice

第Ⅰ部と第Ⅱ部の内容を簡単に紹介しておこう。スジャルトによる第Ⅰ部では、マイクロヒストリーを構成する概念や方法論が、マイクロヒストリーの地理学的一学派的展開と共に説明される。章立ては、地理的一学派的な分類に即しており、マイクロヒストリーの一つのバリエーションである、イタリアのミクロストーリー学派について(第一章)、フランスのアナール学

派やドイツ歴史学への影響（第二章）、英語圏の国への展開と文化人類学との関連（第三章）などが紹介される。第四章では、さらにハンガリーやロシアなど他の言語のマイクロヒストリーにも言及がなされる。また、この地理的―学派的といった軸と並行して、マイクロヒストリーを構成する諸概念の解説も各研究の批評を通じて行われる。よって第Ⅰ部は、多数の実践例を含みつつも“理論編”と位置付けることができよう。第Ⅰ部を受けて、第Ⅱ部では、マグナッセンによって具体的なマイクロヒストリーの事例研究が紹介され、マイクロヒストリーの外延と可能性について検討がなされる。

本書の一つの魅力は、多彩な時間、言語、学派のマイクロヒストリー研究が幅広く取りあげられ、あたかもマイクロヒストリー研究の百科事典の体をなしていることである⁶⁾。先に理論編と位置づけた第Ⅰ部においても、古典的、先駆的な研究から、挑戦的な、また執筆者の定義ではマイクロヒストリーに属さないもののそれに近い観点から行われた研究までが言及され、マイクロヒストリーの可能性の幅広さを感じることができる。本稿でも、代表的ないくつかのマイクロヒストリー研究を紹介することで、その特長を生かしたい。

本書において着目すべきことは、前半部と後半部を執筆した二人の著者間で、マイクロヒストリーに関する考え方が、意図的に統一されていないことあげられる。著者たちは、二人の間にマイクロヒストリーの境界、ポストモダニズムとの関係やその到達点に関して議論があることを否定せず、本書をマイクロヒストリーについての対話や議論としても位置付ける。本書は、マイクロヒストリーにおける包括的な理論と実践の提示を試みである一方でありながら、それをめぐる諸議論に関し、画一的な答えを出さないことでその可能性を広げているともいえる。

以上を踏まえ、スジャルトによる前半部だけでも理論と実践双方の要素が含まれていること、マグナッセンによる後半部は各論的な章立てであること、また前半部と後半部の著者がそれぞれ異なった定義を持ちつつ別の観点から論を展開することにより全体としてある種のわかりにくさも否めないことから、以降、スジャルトの論のみを取り扱うこととする。また、上述の通りスジャルトは、地理的―学派的展開をもとに章立てを行っているが、日本においてはマイクロヒストリーそのものがあまり紹介されていない点や、欧米諸国の各歴史学派に関する知識が前提となっている点を踏まえ、本稿では地理的―学派的展開については最小限の言及に留めてマイクロヒストリーの構成概念や理論を中心に紹介したい。

3. “^ミクロ

3. “微視的な視点”：イタリア・ミクロストーリア学派の研究から

冒頭でも述べたが、もっとも明確なマイクロヒストリーの特徴は、特定の出来事、人物、地域といった、ある限定的な対象を集中的に調査するという点にある。この特徴は、イタリアのミクロストーリア学派の人々の研究にさかのぼることで、よりわかりやすくなる。ミクロストーリアの中でも代表的研究とされる C.ギンズブルグ（Carlo Ginzburg）の『チーズとうじ虫』（1976=2012）をもとに、その特徴を見ていきたい。

『チーズとうじ虫』は、16世紀の北東イタリアで異端の嫌疑をかけられた粉ひき男、スカンデッラ（通称メノッキオ）の異端審問の記録をもとに書かれたものだ。『チーズとうじ虫』のタイトルのもととなった、メノッキオの語る宇宙観は、以下の通りである。

私が考え信じているのは、カオスである、すなわち、土、空気、水、火、などこれらの全体はカオスである。この全体は次第に塊りになっていった。ちょうど牛乳のなかからチーズの塊ができ、そこからうじ虫があらわれてくるように、このうじ虫のように出現してくるのが天使たちなのだ。そして、非常に聖なるお方が、それらが神であり天使たちであるように望まれた。これらの天使たちの数のうちには、それ自身もこの塊りから同じ時に創造された神も含まれている。（Ginzburg 1976=2012: 41）

この粉ひきの世界観は、“神による世界の創造”とはかけ離れたものであり、メノッキオは異端宗教の信仰者として、否定もむなしく処刑される。このメノッキオの物語の最後に言及されるのが、もう一人の粉ひき男パロニ（通称ふとっちょのピギノ）である。彼もメノッキオとよく似た宇宙観を有しており異端審問にかけられたが、同様に異端信仰を否定し、辛うじて処刑を免れた。

ギンズブルグは、当時の異端審問調書などを詳細に読み込み、メノッキオやピギノの宇宙観と異端審問の背景をさぐっていく。当時、粉ひきという職業については、異端の嫌疑がかけられやすかった——地方領主との結びつきから特権的地位を持ち、農民たちと敵対関係にあつて悪人や詐欺師といったステレオタイプのイメージが共有されており、さらに水車小屋や風車小屋がコミュニケーション手段のほとんどない時代における社交場として機能していた——こと。メノッキオは驚くほど書物を解釈し、独特の宇宙観を独自に組み立てていたこと。いくつかの貴族の家につかえ議論を耳にする中できあがったピギノの価値観は、当時のイタリアの異端派の思想よりもさらに唯物主義的であったこと。互いに離れた土地に暮らしていたピギノとメノッキオの境遇や宇宙観には、偶然の一致では片づけられない類似がみられたこと。以上のことなどから、ギンズブルグは彼等の背景に、16世紀イタリアの農民文化とエリート文化の間に存在する複雑な混合関係をみて、“思想はエリート文化の中からしか生まれえない”という固定観念にあらがおうとする。

このように、マイクロヒストリーの第一の特徴は、望遠鏡（telescope）ではなく顕微鏡（microscope）を手に、“微視的な視点”を持って、ある特定の人や状況に焦点を当てるという点である。これは、鳥瞰的な視点で描かれる国や社会集団に関する歴史研究や、フランスのアナール学派による“長期持続（longue durée）”的研究、計量的な手法を用いて特異性より一般性を描こうとする歴史研究とは、明確に異なるものである。ミクロストーリー学派が、これら経済史的な歴史学モデルの反発から生まれてきたことがたびたび指摘されること（Burke 1991 など）にも示されるように、顕微鏡を持つことは、これまでの歴史学と差異化された特徴なのである。

しかし、『チーズとうじ虫』が、16世紀イタリア粉ひき男の生態についての研究に留まらな

いように、マイクロヒストリーは、単に対象とするもの一事例についてのケース・スタディではない。マイクロヒストリーはこれら小さな事物の調査から、“マクロな歴史学の問い”の答えを探求することである、とスジャルトは強調する。この点については次章で紹介するが、この要素に関連する、“標準的な特異性 (exceptional normal)”と“尺度の変更 (changing the scale)”という二つの概念を以下でまとめておきたい。

顕微鏡を手にし、マイクロヒストリーを実践しようとしたとき、“マクロな歴史学の問い”の答えを探求するための適切な対象や素材はどのように選ばばよいのか、という疑問が立ち現れる。これに対するミクロストリア学派の答えが、“特異な標準性”または“標準的な特異性”と呼ばれる概念である。例えばギンズブルグの着目したメノッキオは、その時代の平均的な、または統計的に頻度が高い人物とは言えない。その意味においては、典型的であるというよりは、特異な人物である。しかし一方で、彼らは、その時代の文化的な限界から抜け出すことはできず、異端者として裁かれた彼の裁判記録を読み解くことで、当時の農民文化について示唆が得られる。彼の特異な自白のうちに、「メノッキオと同時代かそれより少し後の時代の同種の記録のなかでは分散してしまっているかあるいはほとんど語られていない一連の要素が収斂していくのを見ることができる」ように、「*極限な事例*」は一方で「*代表的*」ともいえる (Ginzburg 1976=2012: 14) このような標準的であり特異的でもある事例を選び取る、“標準的な特異性”の概念が、事例選びのヒントとなる。

また、G.レーヴィ (Giovanni Levi) の“尺度の変更”という概念によって“微視的な視点”の意味はよりわかりやすくなるだろう。レーヴィは、ギンズブルグとならぶミクロストリア学派の著名な研究者である。まずは、彼のある村の土地取引に関する研究 (Levi 1985) を紹介しよう。

17世紀、サンタナ地方の司祭キエーザは、大司教にエクソシストとして罪を問われ、裁判にかけられる。しかし、当初の我々の期待に反し、それはキエーザのエクソシズムではなく、サンタナ地方独自の土地取引システムに起因するものだという。

土地の商業化に関してはこれまで盛んに議論が行われており、西ヨーロッパ諸国の多くやアメリカ植民地で行われた土地取引の早熟性と高い頻度は、資本主義と個人主義の早期の存在を示しているというのが広く信じられている考えである。二つの要素がこの現象のより適切な評価を阻んできた。第一に、多くの解釈は集合的なデータに基づいていた。(中略) 第二に、歴史家は、みずからの近代的な商業的メンタリティーに惑わされて、(中略) 土地のさまざまな質を考慮に入れたとしても、関係する価格が極端に変化に富んでいたことに誰も気づかなかった。(Levi 1991=1996: 113)

サンタナにおいて土地は、近親者であるほど高く、部外者であるほどに安く売られており、そこには当時のサンタナ独特の社会的、個人的関係が存在した。しかし、レーヴィのいうように、集合的なデータからそのことは見出せない。観察の尺度を極端に縮めることが、新たな発見につながるのである。

なお、レーヴィやギンズブルグも指摘することであるが、マイクロヒストリーの **micro** とは、必ずしも観察の対象が小さいことを意味しない。一般的な現象を詳細にわたって観察する、このような観察尺度の小ささを、ミクロストーリーア学派の研究者たちは **micro** と名付けたのである。

4. “マクロな歴史学の問い”の答えを探す：フランス・アナール学派の作品から

次に、フランスのマイクロヒストリーから、“マクロな歴史学の問い”の答えを探すとはどういうことを意味するのか、まとめていきたい。

イタリアでミクロストーリーア学派が勃興した 1970 - 80 年代は、フランスでは、L.フェーブール (Lucien Paul Victor Febvre) と M.ブロック (Marc Léopold Benjamin Bloch) 以降、一世を風靡していたアナール学派の第二、第三世代にあたる研究者たちが一時代を築いていた。70 年代初頭には彼等のうちからも、マイクロヒストリーの手法や視点をういた研究が登場しはじめる^⑥。

フランスのマイクロヒストリー研究として早期の先駆的な作品とされるのが、G.デュビー (Georges Duby) の『ブーヴィーヌの戦い』(1973=1992) である。この研究は、フランス史における有名な決戦ブーヴィーヌの戦いを詳細に描き、決戦そのものとその背景だけでなく 13 世紀における戦や戦争の意味を読者に示した。しかしスジャルトによれば、これは本格的なマイクロヒストリーとはいえない。なぜならこの研究は、戦を通して読者を中世の世界に誘うわけでも、異世界の文化を研究の出発点としているわけでもなく、マクロなレベルにおける問いが設定されていないからである。

一方でスジャルトが、マイクロヒストリーとして評価するのは、アナールの代表的な歴史学者の一人 E.ル＝ロワ＝ラデュリ (Emmanuel Le Roy Ladurie) の『モンタイユ』(1975=1990) である。『モンタイユ』は、ギンズブルグの『チーズとうじ虫』と並んで「この二つの書物は、学問的な成功と広範な読者へのアピールを兼ね備えたもの」(Burke 2004=2008: 68) と評されたように、一般にも有名な作品でもあった。

モンタイユとは、14 世紀のピレネー山脈に存在した小さな村の名である。異端審問の記録によって描かれるモンタイユの農民の日常は驚くほど詳細にわたり、女たらしの司教がいかにして女性を口説き愛欲の限りを尽くしたのか、男たちの同性愛がどのようなものであったか、といったことまでもがリアリティをもって描かれる。それは、パミエの司教であり、のちのアヴィニョン教皇となる聖職者フルニエが、モンタイユ村付近で広まっていた異端派カタリの撲滅に並々ならぬ情熱を注いでいたことで可能になった。ル＝ロワ＝ラデュリによって「メグレ警部をもっと執拗で高圧的にしたような人物」(1975=1990: 9) と言われたフルニエは、モンタイユ村の農民ひとりひとりが異端派であるかを判断するために大変な努力をみせる。モンタイユ村の異端嫌疑者 25 人の法廷の公判には逐一立会って巧妙かつ詳細な尋問を行い、本来なら下僚の書記に任せる記録も全て自分で行ったことで、詳細な異端審問書を後世に残したの

である。

この研究は、人類学の共同体研究の事例に倣ったものであるが、彼の問いはアナールの伝統的関心である心^{マントリデ}性史に刺激を受けていた。すなわち、モンタイユ村というあるコミュニティの研究を通して彼が描こうとしていたのは、当代の人々の性や信念、そして時間や空間、他の世界についての考え方というテーマであり、これはフランスの歴史学者の間でも多く議論されていた心性史の大きな問題系と共通していた。一人の変った聖職者の存在によって偶然生まれた、尋常でない細かさで農民の日常を描く異端審問書は、ル＝ロワ＝ラデュリによってより大きなテーマ、すなわち中世の人々の心性はどのようなものかという“マクロな歴史学の問い”のもとに再編纂されたといえる。

“微視的な視点”をもち、ある事象や人、状況に焦点をあてることで、対象についての集中的な歴史研究が可能となり、過去の歴史学が行ってきた“長期持続”する国家や社会集団についての研究とは異なった歴史を描き出すことができる。しかし、それはマイクロヒストリーの第二の側面にすぎない。マイクロヒストリーの目的は、特定の事例研究よりもさらに広く大きなもの——すなわち“マクロな歴史学の問い”の答えを探求するといったことであると。少なくとも、スジャルトにとって、“マクロな歴史学の問い”を想定しない研究は、ミクロな視点からの分析が用いられていても、それはマイクロヒストリーたりえないのである。

5. “「行為＝行為者」の重視”：アメリカ・文化人類学的研究から

マイクロヒストリーの理論や手法は人類学に依拠したことが多い。人類学、特にアメリカの人類学者 C.ギアツ (Clifford Geertz) の人類学と、歴史学との邂逅がマイクロヒストリーの発想の背景にあることはこれまでも指摘され (Burke 1991)、またその相違点や類似点も時折議論がなされてきた (Levi 1991, Darnton 1984 など)。スジャルトも、マイクロヒストリーがイギリスの社会人類学やアメリカの文化人類学の方法論を受容していること、そしてマイクロヒストリーと歴史人類学が類似していることを認めている。例えば、特定の事例を一般化することで、事例の文脈の構造を明らかにするという点は、マイクロヒストリーと人類学に共通するところであるし、B.ルプチ (Bernard Leptit) の考える“尺度の変更”の目的——社会的行為の枠組みを形成する文脈のシステムを明らかにすること (Leptit 1993: 126) ——は、「小さな、しかし濃密に織り込まれた事実から大きな結論を描き出す」ことを示すギアツの“厚い記述 (thick description)”論 (Geertz 1973: 28) によく似ている。

一方で相違点もある。スジャルトは、人類学とマイクロヒストリーの明確な違いとして「行為＝行為者」に関する認識の差を指摘する。

スジャルトにとってマイクロヒストリーの最大の特徴は、「行為＝行為者」に力点を置くことにある。ギアツの人類学が、文化を個人の間に作用する唯一の行為者とみなすのに対し、マイクロヒストリーは「行為＝行為者」としての個人を重視する。マイクロヒストリーでは、過去の人々を、歴史の手に動かされるパペット人形ではなく、活動的で、意識をもった個人、自

律的なアクターとして扱うのである。この点について、ギアツの歴史人類学に最も影響を受けたアメリカの歴史学者 R.ダーントン (Robert Darnton) の評論『猫の大虐殺』(1984=2007) からみていきたい。

ダーントンの『猫の大虐殺』は、18世紀のフランス人印刷工たちが行った猫の虐殺事件を題材とする。日ごろから劣悪な環境で働かされている印刷工の徒弟たちはある日、親方を陥れ、親方夫人のお気に入りの灰色猫を含んだ多くの猫を虐殺する。虐殺の最中には裁判のまねごとも行われ、それを目にした親方の怒りと親方夫人の悲嘆も相まって、徒弟たちの哄笑を引き起こす。その虐殺の様子はのちのちまで再演され長らく労働者たちを楽しませた。

ダーントンは、現代の私たちがきいても決して笑えるものとは思えないこの虐殺がどうしてこれほど彼らを楽しませたか、という疑問から、この事件に切り込んでいく。ダーントンの解釈によれば、徒弟たちは、パリの親方と職人間の緊張関係や職人組合の祝祭を背景に、猫にまつわる象徴的意味を踏まえて、日ごろ虐げられている親方たちへの反撃を行った。この虐殺は、悪魔の化身や家族集団の代表、女性性という猫の象徴的意味を前提として、これら複数の意味を演じた印刷職人による、象徴的暴力と解釈されるのである。

このダーントンの研究は、フランスの歴史学者 R.シャルチエ (Roger Chartier) などから批判を受け、象徴の解釈の方法などをめぐる議論を引き起こすが、スジャルトは「行為＝行為者」の欠如という観点から批判を行う。『猫の大虐殺』は、一つの歴史的な出来事を“微視的な視点”で分析しているものの、ここに「行為＝行為者」の介在の余地はなく、解釈される文化が存在するのみである。換言すれば「行為＝行為者」は、文化の表出に過ぎないものとみなされている。ゆえに、スジャルトによれば、ダーントンの研究は、完全にマイクロヒストリーの要件をみたしているとはいえないのである。

6. マイクロヒストリーの意義と可能性

最後に、常にミクロであることを強調してきたマイクロヒストリーと、マクロな“歴史”とのつながりを説明するフラクタル理論を紹介したい。

フラクタルとは、よく知られているように、拡大するとその度合いに応じて元の構造に似た詳細な構造がみられる複雑な幾何構造を指し、数学や自然の中に出現するとされる。スジャルトはそのような自己相似性が、我々の生きる世界や歴史の中でもみられること、そしてマイクロヒストリーとマクロな“歴史”にもそのような関係にあることを指摘する。

マイクロヒストリー研究者が、歴史に関する調査を行いながら、一般的な背景を想起するとき、そのパターンが特定のケースで見られたことに気づく瞬間がある。多くの個々の事例や数字をみていくとき、その中のある一つの事例がマイクロヒストリーとして使えるのもであると気づくことがある。すなわち、その年代全体の特徴や自分が研究している問いを反映した特定の事例を発見するときに訪れ、それがマイクロヒストリー研究となる。

この際のフラクタル的自己相似性は、現実と本との間に現れるものではない。“歴史”、すな

わち想像上の、潜在的な、認識しきれない表象である“歴史”と、限定的でありそれゆえに認識が可能な表象である“マイクロヒストリー”、この二つの表象の間の自己相似なのである。この性質により、マイクロヒストリーは、マクロな表象“歴史”に対しても意義をもつこととなる⁽⁷⁾。

“^{ミクロ}微視的な視点” “マクロな歴史学の問い” “「行為―行為者」の重視”という三つの構成要素は、それぞれが関係しあってマイクロヒストリーの特徴となり、意義を生み出している。顕微鏡を通して歴史を見るかのように個人の行為を描きだしながら、同時に“マクロな歴史学の問い”にも向かい合うマイクロヒストリーのもとなるのは、「*歴史の構造が個々人の行為によって作られ、支えられ、破壊されるという信念*（本書 p75）」である。この信念に支えられたマイクロヒストリー研究は、フラクタルな性質によりマクロな“歴史”の一部分を表すことが可能となる。

このような歴史観に基づくマイクロヒストリーは、文化史にも社会史にも親和性を有する。社会史や文化史においては、歴史をつくった行為者たちがどのように生き、出来事に対してどのような意味をもったかを知るために、マイクロヒストリーが役立っだろう。また、読者に対して興味深い研究を提供できるという点も、マイクロヒストリーの大きな魅力である。個人のリアリティのある感覚を、遠い時代につなげて考えさせることのできるマイクロヒストリーは、読者にとっても魅力的で面白い学問なのである。

7. おわりに

3 から 6 にかけて、スジャルトによるマイクロヒストリーの構成要素、特徴となる理論とその意義を整理した。これらの構成要素が関係しあって一つの動的な歴史を描くマイクロヒストリーの輪郭がぼんやりとでも伝わっただろうか。

人類学との密接な関係があるのは上述した通りであるが、それに限らず、マイクロヒストリーは、学際的な性質をもつ実践である。マイクロヒストリーにおいて、個人の行為に対する余地を残すほどに“^{ミクロ}微視的な視点”持ちながら、“マクロな歴史学の問い”という大きな問題系へ接近し、両者のバランスを図ろうと試みる態度は、社会学も示唆を得られるだろう。事例の選び方という点でも、“特異な標準性”の理論や、フラクタル理論は興味深い。その時代の歴史的問題が集約される、具体的な一つの事例を見つけるのは容易なことではないと考えられるが、スジャルトはそのために学者側の経験と知識が必要されることを指摘する。適切な事例を求めて問題意識を持ち続け、その選択を可能にするために経験と知識を培っていくことが、マイクロヒストリーに限らず、よい研究を生み出す姿勢なのだろう。

また本書では、自伝の研究の方法論に関しても言及があった。本稿で取り上げなかったが、マグナッセンは、後半部の第 8 章で自伝の研究の歴史的意義について考えるあまり、研究対象を自らにまで広げ、自己の恋愛体験のマイクロヒストリー的な考察を試みる。一般に読まれるべく自伝が出版された偉人ではなく、名もなき個人の生活の語りに歴史学のスポットライトを

浴びせるマイクロヒストリーの視点が生かされている。このような試みは私小説など文学を用いた研究などにも応用が考えられるだろうが、具体的な手法については未だ検討の余地が残る。

なお、字数の都合上、ドイツやロシアなど、各国の歴史学とマイクロヒストリーの動向や、興味深いマイクロヒストリー研究例を省略せざるを得なかったが、本書は一つの新しい学問の潮流が各国でどのように展開されていったかという視点からも興味深い研究であった。

これまで曖昧な部分もあったマイクロヒストリーの要素を濃縮させ、同時にその曖昧さがもっていた可能性をより広げる本書は、歴史社会学を刺激し、独創的な研究を生み出す手がかりとなるに違いない。

<注>

- (1) 管見の限り、日本語・邦訳文献の中でマイクロヒストリーを広い視点から論じているものは、現在カリフォルニア工科大学で教鞭をとるアメリカの歴史学者 J. ブルーア (John Brewer) が来日した際の講演記録「マイクロヒストリーと日常生活の歴史」(水田大紀訳 2005) のみであった。ブルーアの講演記録の着目すべき点として、一概にマイクロヒストリーと呼ばれる各国のマイクロヒストリー的手法を用いた歴史学——例えば本書でも言及のあるイタリアのミクロストリア学派やドイツの“日常史 (alltagsgeschichte)”、アナール学派第四世代の歴史学などをまとめて論じる際には、その国固有の歴史学の伝統があることを考慮し、十分な注意を払って融合すべきだという指摘を行っている点があげられる。R. ブラウン (Richard D. Brown) は本書がそのような個別の文脈を軽視している点を指摘している (Brown 2014)。
- (2) 本書におけるマイクロヒストリーという言葉は、文脈に応じて、学問や学派、手法、またその具体的な研究を指す。本稿においては、学問の概念を「マイクロヒストリー」、マイクロヒストリー的手法を用いて行われた個々の研究を「マイクロヒストリー研究」と使い分けた。また、学派に関しては、マイクロヒストリーの名の起源となった、マイクロヒストリーのイタリアのバリエーションについては、イタリア語で「ミクロストリア (学派)」とするが、それ以外のマイクロヒストリー的手法を用いて研究を行う学派・実践者集団については特に区別せず「マイクロヒストリー研究者」とする。
- (3) アイスランドのレイキャビクにある独立研究機関。人文科学、社会科学系の研究者が所属する。
- (4) 著者情報の一部はマイクロヒストリーネットワーク (<http://www.microhistory.eu/>) も参照した。
- (5) この幅広さゆえ欠点もある。ブラウンは、スジャルトが複数言語の数多くの事例を紹介する中で、事実関係の間違いも発生していることを指摘している (Brown 2014)。
- (6) とはいえ、筆者が述べているように、「ミクロ分析の手法が、イタリアのマイクロヒストリ

一家からフランスの歴史家に教えられたと考える根拠はない。」(本書 p27) ことは留意しておく必要がある。また、アナール学派は、70 年代ごろより「新しい歴史学」による歴史学の専門化・細分化などに対する危機感を感じはじめ、80 年代末に自らの「批判的転回」^{トウルナンクリティック}を提唱、マイクロヒストリーの知見も大いに参照し取り入れることを宣言した。しかしここで紹介するフランスのマイクロヒストリー研究として有名なものは、「批判的転回」に際したアナール学派がマイクロヒストリー的手法の導入を模索するよりも 15 年ほど前のものである。

- (7) なお、このフラクタル的な性質を基礎として、マイクロヒストリーを成立させる具体的な論理がアブダクションである。アブダクションは、帰納法と同じく蓋然的な推論形式に分類されるものであるが、帰納法とも演繹法とも異なる第三の推論である。帰納法が観察事実の集積であるのに対し、アブダクションは観察事実、特に変則的な事実を積極的に説明する、説明力のある仮説を導き出す。これは、もともとアメリカの科学者 C. パース (Charles Sanders Peirce) によって提唱された論理であるが、E. ミューア (Edward Muir) によってマイクロヒストリーに援用された。

<参考文献>

- 赤川元昭, 2011, 「アブダクションの論理」『流通科学大学論集——流通・経営編』(24) : 115-130.
- Annales ESC*, 1988, “Histoire et Sciences sociales. Un tournant critique?” *Annales* (=1999, 「アピール歴史と社会科学——^{トウルナンクリティック}批判的転回？」二宮宏之編訳『歴史・文化・表象』岩波書店, 165 - 170.)
- ブルデュー, P, R・シャルチエ, R・ダーントン, 福井憲彦訳, 1986, 「鼎談：文化の歴史学をめぐる」『思想』(740) : 250-271.
- ブルーア, ジョン, 水田大紀訳, 2005, 「マイクロヒストリーと日常生活の歴史」『パブリック・ヒストリー』(2) : 19-37.
- Brown, Richard D, 2014, “Review of Books: Sigurður Gylfi Magnússon and István M. Sziujártó. *What Is Microhistory? Theory and Practice*” *The American Historical Review*, 119(3): 840-841.
- Burke, Peter, 1991, “The New History, its Past and its Future” Peter Burke eds., *New Perspectives on Historical Writing*, Cambridge: Polity Press. (=1996, 谷川稔訳「ニューヒストリー——その未来と現在」谷川稔・谷口健二・川島昭夫・太田和子他訳『ニュー・ヒストリーの現在——歴史叙述の新しい展望』人文書院, 5-29.)
- 2004, *What is Cultural History?*, Cambridge: Polity Press. (=2008, 長谷川貴彦訳『文化史とは何か』法政大学出版局.)
- Darnton, Robert, 1984, *The Great Cat Massacre and Other Eposodes in French Cultural History*, New York: Basic Books. (=2007, 海保真夫・鷺見洋一訳『猫の大虐殺』岩波書店.)
- Duby, Georges, 1973, *Le dimanche de Bouvines: 27 juillet 1214*, Paris: Editions Gallimard.

- (=1992, 松村剛訳『ブルーヴィースの戦い——中世フランスの事件と伝説』平凡社.)
- , 1982, *Les orientations récentes des recherches historiques en France*, Interview.
- (=1999, 「歴史認識における座標軸の転換」二宮宏之編訳『歴史・文化・表象』岩波書店, 3-13.)
- フランドロワ, イザベル, 尾河直哉訳, 2000, 「『歴史総合雑誌』から今日の『アナール』へ」『環』藤原書店, (1): 308-320. (再録: 2003, 尾河直哉訳『「アナール」とは何か——進化し続ける「アナール」の一〇〇年』藤原書店, 9-29.)
- Geertz, Clifford, 1973, *The Interpretation of History: How historians map the past*, Oxford and New York: Oxford University Press.
- Ginzburg, Carlo, 1976, *Il formaggio e I virmi: Il cosmo di un mugnaio del "500*, Turin: Einaudi. (=2012, 杉山光信訳『チーズとうじ虫』みすず書房.)
- ギンズブルグ, カルロ, 竹山博英訳, 1993, 「ミクロストリアとはなにか——私の知っている二、三のこと」『思想』(826): 4-29.
- Lepetit, Bernard, 1993, “Architecture, géographie, histoire: Usages de l'échelle” *Genèses* 13: 118-38.
- ルプチ, ベルナル, 小田中直樹訳, 2008, 「今日の『アナール』」『思想』岩波書店, (1012): 7-28.
- Le Roy Ladurie, Emmanuel, 1975, *Montaillou: village occitan de 1294 à 1324*, Paris: Editions Gallimard. (=1990, 井上幸治・渡邊冒美・波木居純一訳『モンタイユ——ピレネーの村 1294~1324 (上) (下)』刀水書房.)
- Levi, Giovanni, 1985, *L'eredità immateriale: Carriera di un esorcista nel Piemonte del seicento*, Turin: Einaudi.
- 1991, “On Microstory” Peter Burke eds., *New Perspectives on Historical Writing*, Cambridge: Polity Press. (=1996, 谷川稔・谷口健二・川島昭夫・太田和子他訳『ニュー・ヒストリーの現在——歴史叙述の新しい展望』人文書院, 107-130.)
- 二宮宏之「思想の言葉」『思想』(826): 1-3.
- Muir, Edward, 1991, “Introduction: Observing trifles” Edward Muir and Guido Ruggiero eds., *Microhistory and the Lost People of Europe*, Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press.
- 緒方直哉, 2003, 「訳者あとがき」イザベル・フランドロワ『「アナール」とは何か——進化し続ける「アナール」の一〇〇年』藤原書店.
- 渡辺和行, 2007, 「歴史学の危機と『アナール』——21世紀の社会史にむけて」『奈良女子大学文学部研究教育年報』(3): 49-62.